メルヴィルの詩学
――『白鯨』におけるサウンドスケープ

関　根　全　宏

本発表では、19 世紀アメリカにおける観念論をめぐり、ハーマン・メルヴィルがいかに独自の思想を反ロマン主義的な詩学を通して形成したかを、メルヴィルの代表作『白鯨』をとりあげて論じた。

観念的な想像の磁場としての海と厳然たる現実としての海――この二つの海の諸相をメルヴィルが意識していたことを議論の前提として私が論じたのは、〈外部〉としての海が詩的言語の使用によって聴覚的に記述される表象の特異性についてである。本発表では、聴覚的に描かれる海景を〈サウンドスケープ〉と呼び、視覚と聴覚をめぐる問題意識を眼目とし、第 58 章「ブリット」、第 111 章「太平洋」、エピローグを中心に、詩的な言葉の響きが海の音と共鳴する形で散文中に立ち現れる場面において、イシュメールが詩的言語を使用する内在的理由を探った。

アメリカロマン主義時代に支配的だった超越思想とは、ラルフ・エマソンの思想に代表されるように、聴覚ではなく視覚をめぐるものだった。それは、視覚が前提とする外界との距離を傲慢に消し去ることで、自我を拡大させ世界との一体化を欲望する思想である。観念論の本質にこうした視覚の問題がある一方、メルヴィル的聴覚の原理とは、視覚中心主義に対するアンチテーゼとして機能する。それは、視覚と聴覚の認識論をめぐるウォルター・オングの批評理

論を援用するならば、あくまでも外界と自己との間にある距離を認めた上で、外界との一体化を可能にする音の〈中心化作用〉ないしは〈統合する感覚〉によって、世界との一体感を志向するものと言うことができる。

とはいえ、メルヴィルが反ロマン的であったというわけでは決してない。海を観念的／視覚的にではなく、詩的言語が奏でる音の響きを頼りに聴覚的により審美的に表現することも、また、そのサウンドスケープにおいて死者へと想いを馳せ、死者と共にある世界との調和ないしは一体感を描くことも、ロマンティックな営みに他ならない。つまり、メルヴィル的聴覚の原理とは、反時代的でありながら、とりもなおさず極めてロマンティックなものなのだ。

『白鯨』におけるサウンドスケープは、歴史的にみれば視覚中心主義を相対化し、超越論の装置として機能していた視覚の原理の過剰さやその限界をあぶりだす一方、言語学的ないしは文学ジャンル的にみれば、詩と散文のジャンル混交を生み出すメルヴィル独自の詩学を浮かび上がらせる。さらには、世界と自己との相関性をとらえる〈交感〉という概念を、詩学的、言語学的に再定義する一助ともなるだろう。ここにこそ、海を観念的にではなく、聴覚をめぐるイシュメールの身体的、言語的反応に着目して再検討する批評的意義があることを明らかにした。